

会誌編集委員会 女子部

Number
47

これからのIT社会を支えるのは女子？

武蔵野学院大学 上松 恵理子

フィンランドでは2016年のプログラミング教育が必修化され、2年前からプレカリキュラムが政府のWebサイトで公表された。それに伴い、一般の塾やワークショップなどの活動も増えてきた。フィンランドで学校訪問を数回したが管理職のほとんどは女性だった。そして国会議員の女性比率も日本に比べて多い。そのような中でもプログラミングを専門に学ぶ率が男女の人口比率に比べ、女性が少ないときがかつてはあった。

フィンランドのリンダ・リウカス (Linda Liukas) 氏はプログラミング女子の言葉を生み出したレイルズガールズ (Rails Girls) というワークショップを行った。彼女を有名にしたのはそれだけではない。クラウドファンディングでの絵本を作るプロジェクトを立ち上げ、幼い女の子が読める Hallo Ruby という絵本をつくるという行動を起こした。これらの活動は世界中に広まり、何万人もかかわるものとなっている。

フィンランドでプログラミングの授業を見ると、これまでのプログラミング教育のイメージが変化するだろう。私が見たフィンランド中学校の選択プログラミングの授業では男女ペアのグループワークで、ゲームのストーリーを作ることから始めるものであった。ゲームを作るということは、どういったゲームにするのか、どんな登場人物にするのか、そしてどうすると点数が入ったりクリアに

なったりするのかということも話し合う。模造紙に書き込まれたアイデアを見ながら議論し、ゲームの全体の展望を見てまたグループワークをする。女子がてきぱきと壁に模造紙を貼ったり男子の意見をまとめたりという様子が見られた。それからパソコンの前に座りプログラミングが始まる。女子が意見を取りまとめているチームも少なくない。上から下へのトップダウンではなくなった社会構造が女子の活躍を後押ししている、との声もあった。

そのような傾向は、昨年(2016年)ドバイを訪問した際にも見られた。これはITに高等教育がシフトしたことがきっかけだったという。このままの状況で女性の比率が高まってくると、プログラミング女子がIT社会を支えることになるかもしれないという人もいた。ドバイは2020年の万国博覧会開催に向け、多くのビルが建設ラッシュである。十数年前はまったく何もない砂漠で砂しかなかった場所にあつという間にリトルマンハッタンといわれるくらいにビルが立ち並んでいる。それを可能にしたのは、日本人が開発した海水を真水に替える装置であり、建設現場の男性労働者たちでもある。一層の進化を遂げる国においてもプログラミング女子の活躍が社会に影響を及ぼしつつある。

詳しくは <https://www.ipsj.or.jp/> をご覧ください

ITに関する最新情報や研究発表の場の提供を通じて、あなたのお役に立ちます。

会員募集中!!



申込/照会先 一般社団法人 情報処理学会
〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台1-5 化学会館4F
Tel(03)3518-8370(会員サービス部門) E-mail: mem@ipsj.or.jp